

第315回くらしの植物苑観察会 令和7年9月26日（金）

「土器から読み解く先史時代の植物とくらし」

山下 優介 当館研究部考古研究系 助教

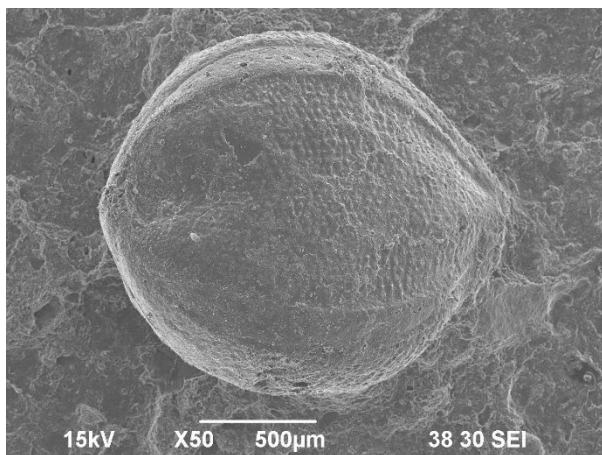
本日は、土器に残された「種子圧痕」に注目して、縄文時代や弥生時代の人びとが利用した植物を紹介していきます。縄文土器や弥生土器といった土器は、遺跡から豊富に出土するため、考古学における主要な研究対象の一つです。年代の指標や、地域間の交流関係を示す資料であるだけでなく、日常生活で使われた土器には、当時のくらしや社会を復元するヒントが隠されています。

土器を観察すると、表面にくぼみが見つかることがあります。そのようなくぼみのうちには、土器の製作過程に付着した植物の種子が焼成時に失われ圧痕となったものがあります。それらを「種子圧痕」と呼びます。土器に残る圧痕をシリコンゴムで型どりし、圧痕のレプリカを走査型電子顕微鏡で観察する「レプリカ法」によって、先史時代の植物利用の実態がわかってきました。

縄文土器の圧痕調査では、さまざまな種子に出会えます。ダイズ属やアズキ亜属といったマメ類や、シソやエゴマを含むシソ属の果実からは、当時の人たちがそれらを重要な食料としていたことが考えられます。また、ドングリやクリ、クルミなどがよく知られる堅果類は、食料だけでなく、木材としても利用されました。その他に、キハダ、サンショウ、ニワトコ、ミズキなど、縄文時代のくらしを支えた数々の植物が、土器の圧痕から見えてきます。

弥生時代のくらしというと、水田稲作、イネの栽培を基本とした生活がイメージしやすいかもしれませんが、アワやキビ、いわゆる雑穀の利用が同じ頃に始まり、各地で栽培されていたことが土器圧痕の研究により明らかになりました。直径が1～2mm程度の圧痕が多量に残された弥生土器片をレプリカ法で調査してみると、それらはアワやキビの圧痕で、なかには種子の表面組織まで鮮明に観察できるものもありました（図左）。この土器が出土した長野県松本市のあたりでは、弥生時代に積極的に雑穀が利用されていたのでしょう。

紹介した植物は、くらしの植物苑内でそのほとんどを観察することができます（図右）。講話後に苑内を散策していただき、実際に育っている姿も是非ご覧ください。



左 アワの圧痕レプリカの電子顕微鏡画像



右 くらしの植物苑内の雑穀畑

.....

次回予告 第316回くらしの植物苑観察会 令和7年10月25日(土)

「くらしの植物苑の菌類」

栃原 行人 氏(千葉県立中央博物館 研究員)

13:30~15:30 くらしの植物苑 東屋 申込不要